

崇仁小学校をわすれないためにセンター

2018年度活動報告

京都市立芸術大学は、2023年に崇仁地域への移転を予定している。本研究プロジェクトは、崇仁地域のこれまでとこれからを、写真／映像／音／ことばなど、さまざまな方法を用いて記録し、未来に向けて継承することを目的としている。

記憶をうけつぐためには、資料あつめや映像による記録、人びとへの聞き取りなどに加え、あつめられた記録を未来の人たちに手渡し続けるための、組織や場をつくることも大切となる。本プロジェクトは、こうした記憶の継承のためのプラットフォームを「崇仁小学校をわすれないためにセンター」と名付け、そのあり方についても、関連するたくさんの人たちと一緒に考えていきたい。基軸になるのは、市民自らが自分の暮らす地域や、関係するコミュニティにおいて生じた出来事を記録し、それをアーカイブとして継承する「コミュニティ・アーカイブ」の手法である。

具体的にはまず、元崇仁小学校を舞台にして、建築や小学校にまつわる記憶を掘り起こしたり、これらに向けて記憶を共有するための基盤をつくる予定である。今年度はその準備として、「建築物ウクレレ化保存計画」で知られる美術家の伊達伸明氏や、移転設計チームの建築家・大西麻貴氏らとともに、崇仁小学校校舎の見学や、元生徒さんたちへの聞き取りなどを行った。

次年度は、崇仁小学校が存在する最後の1年間となる。最後の花見、最後の夏休みなど、崇仁小学校があるからこそ成り立つ風景は、この1年間が最後となる。その貴重な時空間を味わうための公開イベントなどを開きながら、資料の収集、建物と風景の記録、小学校にまつわる記憶などの聞き取りを行っていきたい。

佐藤 知久（芸術資源研究センター准教授）